

# 画像データベースから生まれる新たな創作活動について

## Image Database as a Source of Creative Activities

前崎 信也

Shinya Maezaki

立命館大学 立命館グローバル・イノベーション研究機構, 京都市北区等持院北町 56-1

Ritsumeikan University, Ritsumeikan Global Innovation Research Organization

56-1 Tojiin kitamachi, Kita-ku, Kyoto

**あらまし:** 立命館大学アート・リサーチセンターでは、在外コレクション所蔵の日本の工芸品のデジタルアーカイブ・プロジェクトを2009年より行っている。本発表の前半ではプロジェクトの調査先機関、及び調査した作品点数やその内容の概要を紹介する。後半ではイメージデータベースの公開以降、新たに広がった人的ネットワークや研究・創作活動事例について述べる。それにより、デジタルアーカイブという行為が、いかに社会や芸術家に影響を与え、新たな文化の発信力につながっていくのかという可能性について検討する。

**Summary:** The Art Research Center, Ritsumeikan University, has been developing a digital archive of Japanese decorative arts since 2009. To begin with, this paper will introduce the latest report of the project including the list of affiliate institutions and the number of digitized works. The main purpose of the project is to create image databases for scholarly researches, but the project has also widened the international human network and resulted to form a number of cultural activities. The second half of the paper will introduce some of the examples and discuss the role of digital archive projects as a source of new creative activities.

**キーワード:** 画像データベース、陶磁器、竹工芸、漆器、コラボレーション

**Keywords:** Image database, Ceramic, Bamboo art, Lacquer, collaboration

### 1. はじめに

インターネット上で公開される画像データベースは年々増加し、学術研究に利用できるレベルの情報をそなえたものも多くなりつつある。立命館大学アート・リサーチセンターでは、海外の美術館・博物館に所蔵される日本の陶磁器及び竹工芸のデジタルアーカイブ・プロジェクトを進めており、その成果として一部データを公開している。本プロジェクトの直接的な成果としては、これまで海外の所蔵機関の収蔵庫に

秘蔵されてきた多くの工芸品の実態が徐々に明らかになり、その学術利用が始まっていることである。しかし、データベース構築のために資料を調査し、その成果を公開するという行為は、学術の場以外にも影響を与える可能性を持つものである。

本発表では、まずこれまでの日本工芸データベース構築で得ることのできた成果を紹介し、その後、データベースの構築や公開によって学術の場以外に広がった文化的活動について紹介する。そうすることにより、



(画像1) 日本陶磁器データベース

URL: <http://www.arc.ritsumei.ac.jp/jcdb/>



(画像2) 日本竹工芸データベース

URL: <http://www.arc.ritsumei.ac.jp/bbdb/>

データベースが、人々や社会に与える文化的影響について検討する。

## 2. 陶磁器データベース・竹工芸データベース

立命館大学アート・リサーチセンターのホームページでは、日本陶磁器データベース及び日本竹工芸データベースの公開を行っている(画像1、2)。これらのデータベースは、2009年より同センターで構築を進めている日本工芸データベースの内、一部の個人所蔵の作品を収録している。日本工芸データベース(非公開)は、欧米の博物館・美術館に所蔵されている日本の工芸品の画像データベース化プロジェクトの成果であり、現在までに工芸品 2,849 件、34,613 画像の調査撮影を終えた。成果の詳細は以下である。

### イギリス

オックスフォード大学アシュモリアン美術館

陶磁器: 280 件 1,940 画像

スコットランド国立博物館

陶磁器: 460 件 3,472 画像

セインズベリー日本藝術研究所

陶磁器・木工芸他: 76 件 533 画像

### ドイツ

ベルリン国立アジア美術館

陶磁器: 134 件 1,209 画像

ハンブルグ工芸博物館

陶磁器・竹工芸: 901 件 8573 画像

リンデン民俗学博物館

陶磁器: 213 件、1,969 画像

グラッシー民俗学博物館

陶磁器: 253 件、1,546 画像

ドレスデン美術館磁器コレクション

陶磁器: 372 件、3,604 画像

ザクセン州立工芸博物館

陶磁器: 57 件、489 画像

### アメリカ

ハワイ大学アウトリーチ・カレッジ

陶磁器: 19 件、142 画像

ミシガン大学美術館

陶磁器: 28 件、286 画像

### 個人コレクション

イギリス、ドイツ、アメリカ、日本等

陶磁器・竹工芸: 1,309 件、10,850 画像

### 3. 画像データベースの美術展覧会での活用

立命館大学アート・リサーチセンターでは構築した画像データベースを使い展覧会の補足的な情報として活用する試みを行っている。2009年12月から2010年4月にかけて英国バース市の Museum of East Asian Art (東亞美術館)で、企画展 Seifu Yohei and His Contemporaries: Meiji Ceramics in the Scholarly Taste が開催された。(画像3)

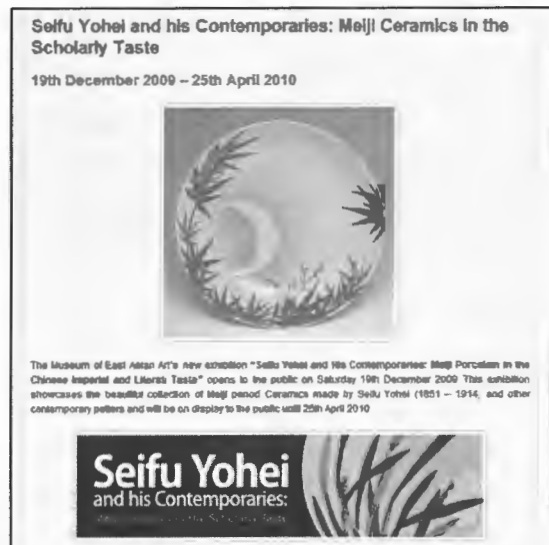


(画像3) 展示会場風景

本展覧会に出品された作品はすべて英国のディヴィッド・キング・コレクション所蔵のものであった。当時、同コレクションについてのデジタル化を進めていたことから、美術館に日本陶磁器データベースを利用した展覧会ウェブサイトの構築を提案し、承諾を得て提供することとなった。(画像4)。展覧会会場では見ることのできない作品の裏側や底部、作者の銘の画像が閲覧できる同サイトは、会の来場者からの高い評価を得た。同サイトは閉会後も過去の展覧会情報として、美術館のホームページからの閲覧が可能である。(画像5)



(画像4) 展覧会ウェブサイト 作品詳細画面



(画像5) Museum of East Asian Art 過去の展覧会紹介ページ

URL: <http://www.meaa.org.uk/past-events>

同様の試みとして、2014年夏には英国セント・アイヴズの Leach Pottery (バーナード・リーチ工房) において企画展 Matsubayashi Tsurunosuke in St Ives 1923-24 (仮題) を計画し、その場で展覧会用のウェブサイトを提供を予定している。本展覧会は大正時代にバーナード・リーチ工房で活動した京焼の陶工である松林鶴之助の遺した記録や作品を展示するという企



(画像6) 松林鶴之助関連資料データベース

URL:<http://www.dh-jac.net/db9/matsubayashi/index.html>

画である。発表者は2012年に松林鶴之助の遺した資料を「松林鶴之助関連資料データベース」として検索・閲覧可能なデータベース化を実施した。本展覧会では、このデータベースを利用して、松林鶴之助関連資料からバーナード・リーチ関連の全文献を表示することのできる展覧会用ウェブサイトを開発予定である(画像6)。

#### 4. データベースから生まれる人的ネットワーク

発表者はこれまで日本工芸データベースの構築の為に欧米の博物館・美術館を中心に所蔵品の撮影を続けてきた。その活動の結果として海外に広範な人的ネットワークを築くことができたのは言うまでもない。しかし、データベースをインターネット上で公開したことや、展覧会の場で活用したことは、新たな人的ネットワークの創造にもつながっている。

日本陶磁器データベースで公開をしているのは、主に先述のディヴィッド・ハイアット・キング・コレクション所蔵作品が中心である。データベースの公開をきっかけにキング・コレクションの世界的な認知度が高まり、キング氏の元には世界中の日本陶磁器コレクターや研究者からコンタクトがあるという。データベースを構築・管理している立命館大学アート・リサーチセンターにも、



(画像7) カリフォルニア大学デーヴィス校での講義風景

北米の日本陶磁器コレクターからのコンタクトがあり、世界的な情報交換の場が広がり続けている。2013年10月には、サクラメント在住の日本陶磁器コレクターのオーガナイズにより、カリフォルニア大学デーヴィス校から招待され、近代日本陶磁器のアメリカ向け輸出とサンフランシスコ港の果たした役割についての講義を行った(画像7)。

#### 5. データベースから生まれる創作活動:

##### 事例1 姫路市大塩町 清風研究会

姫路市大塩町は明治期を代表する京焼の陶工として名高い三代清風與平(1851-1914)が幼少期を過ごした場所である。彼は京都の清風家に入った後、その才能を開花させ、陶工として初の帝室技芸員に推挙された。しかしながら、その活躍の場が主に京都であったため、大塩町がかつて日本の陶芸を代表した人物を輩出した町であるということについて、久しく忘れ去られていた。

発表者は陶磁器データベースの調査の一環で大塩町を訪れた際、町の公民館に三代清風與平作の『水彩磁鳳凰文大花瓶』が保管されていることを発見した(画像8)。町の公民館の押し入れにお宝が眠っていたという話は話題となり、発見の数か月後に同公民館で清風與平とその花瓶に関する講演を行った。この経緯は『神戸新聞』で紹介され、発見された大花瓶は、



(画像8) 三代清風與平作 『水彩磁鳳凰文大花瓶』

URL: <http://www.arc.ritsumeai.ac.jp/jcdb/>

愛知県陶磁資料館(現:愛知県陶磁美術館)で2010年10月から11月に開催された企画展「帝室技芸員の技と美 明治の人間国宝—清風與平・宮川香山から板谷波山まで—」に出品されるに至った。

その後、大塩町では三代清風與平について学ぼうと町内の有志が集まり「清風研究会」を発足。以来、定期的に研究会を開催している。研究会では清風與平に関する文献の輪読会や、陶磁器関連の展覧会への訪問、三代清風與平が活動した京都市の五条坂へのバス旅行(画像9)など、地域の年長者を中心に大きな活動となった。発表者は清風與平に関する講演会を毎年1回、これまでに計3回行った。講演会では毎回地域に眠っていた新たな清風與平作品が持ち込まれ、大塩町には三代清風與平作品の一大コレクションがあると呼べるほどとなった。本研究会のこれからの目標は地域にある清風與平作品を集めた三代清風與平の展覧会を開催することである。



(画像9) 清風研究会 京都バス旅行、2011年4月

## 6. データベースから生まれる創作活動:

### 事例2 竹×漆 プライスコレクションの若冲

竹工芸データベースの構築ではハンブルグ工芸博物館所蔵の約170点、国内の個人コレクション約100点のデジタル化を行った。この他には、2011年、大阪の竹工芸を代表する一家、田邊竹雲斎家所蔵の文献資料等のデジタル化を行った。そして、一連の竹工芸関連のデジタルアーカイブ活動を通じて、田邊小竹氏と漆芸作家の若宮隆志氏と知り合い、竹と漆のコラボ



(画像10) 若宮隆志、田邊小竹作 『提若』、2013年

レーション作品への協力を行うこととなった。

本企画は竹工芸と漆器作家のコラボレーション企画となり、そのモチーフに米国の日本美術コレクターであるジョー・プライス氏所蔵の伊藤若冲の絵画の使用許可を得て、「竹×漆 プライスコレクションの若冲」と題した展覧会の開催が 2013 年に実現した。作品は竹と漆を融合させた作品が中心。竹の上に高蒔絵をほどこす技法の再現や、網代網で若冲の絵画を表現した作品など、伝統的技法を用いながら新しい工芸の創出することを目標にした。

大阪高島屋・日本橋高島屋で展覧会を開催した。日本橋高島屋の会場では発表者をコーディネーターとしてギャラリートークを開催したが、同様のトークショーでは異例の数の来場者が訪れた(画像11、12)。この成功により、「竹×漆プロジェクト」は今後 2 年に1度の高島屋での企画となる事が決まり、毎回異なるテーマで 10 年間継続する予定である。



(図11、12) 日本橋高島屋でのギャラリートーク風景、  
2013 年 6 月

## 7. おわりに

近年の人文科学研究においては、研究成果のデータベース化と公開が成果報告の前提のひとつとしてみなされるようになってきている。今後はそうして無制限に増え続ける学術データベース類を、いかにして有効に活用するかが問題となってくるだろう。しかし、データベースの活用をその構築者が前提として提供するのは正しい事であろうか。これらのデータベースが様々な目的を持って作られることとなったことと同じように、その利用方法も利用者によって千差万別であるはずである。むしろ本来の目的とは異なる方法で利用されるようになったデータベースがあるとするならば、それはその構築者の想定を越えたこととなり、文化的には意味のある広がりをもった重要な事例であると捉えることができるはずである。

本発表の後半で事例を挙げて説明したように、デジタルアーカイブを行う行為とは、人と人、人と物、物と物のつながりに、これまではなかった変化を与える可能性を有している。この関係性に対して与えられた刺激は、新しい創作活動へ発展する可能性を秘めたものである。デジタルをキーワードとしながらも、極めてオーガニックに予測不可能な方向へと向かう発展。もしもデジタルアーカイブやイメージデータベースに、学術的ではなく一般社会に対する価値あるとするならば、新しい文化活動を生む源としての役割をその内のひとつとして捉えるべきなのではないだろうか。